

教員の多忙化と部活動

梓内の文は、昨年の9月に書いたものだが、途中で書くのをやめていた。

中学校の次期学習指導要領は、「何を学ぶか」に関しては、大きく変わらない（と感じている）。
8月2日の審議のまとめ案（8月26日には了承された）には、「部活動」の内容が記述されている。
部活動が大好きで、「中学校教育の柱は部活動だ！」と考えていた者としては少々気になるところである。
選手（生徒）の休養、教員の多忙化解消、ワークライフバランスなど、さまざまな解決しなくてはならない課題がある。
確かに、夏は、部活動の後始末を終え、職員室に戻り、残務整理は午後8時から。業務終了は日付が変わっていたことがざらにあった。家庭を配偶者が守ってくれていたこと、配偶者が（口には出さなかったが）運動部活動出身者だったので理解があったこと、通勤距離が短かったこと、が重なったので乗り越えてきたのだろう。
部活動指導が苦手で、さまざまな事情がある方は大変だと思う。

それから半年以上過ぎ、学習指導要領が告示（公示）された。そして、本日4月28日に、文部科学省は、教員勤務実態調査結果（速報値）を公表した。
夕刊に「中学校教諭6割は過労死ライン」と大きく出ていた。
自分の教諭時代の生活を振り返っても、まさにそのレベルだったと思う。
かつて、職員団体が調査したとき、行政からは全くといっていいほど相手にもされなかったが、今後、この結果はいったいどう活用されるのか。
教員は、どれだけ仕事ができる人でも、授業中は授業しかできず、付随した仕事は、授業後、または部活動後である。
授業（本務）に関する業務は増え、学校外との関わりなど増える一方であり、その上、教員数を増やすことは国として十分な措置はできていない。
いま、教員の多忙化の一因として部活動があげられている。
しかし、施行規則にあるような外部指導員が入ってきたら、指導員と教諭との連携、予算獲得のための報告書、などなどますます多忙化になることは多くの教員は予想つくことだろう。
部活動がない小学校の教員でも忙しいのは同じことである。
解決の鍵は何だろうか。
極端な例として、学校経営者のもと、教員の職務を授業だけに限る従来の考えによるか、教員の部活動指導を兼職兼業扱いとし、本俸と別途支給する金で解決する苦肉の策か？！
しかし、どの方法をとるにしても金が必要である。
国民が教育をどのように考えるか、まさに哲学であり、限りある予算のうち、どれだけ教育に確保することができるかであろう。
ただ、教員は部活動を捨てきれないだろう。私自身、部活動で学校が立ち直った経験もあるし、教育的な価値はある。土曜・日曜の練習試合で、他校や生徒と自校（自分）と比較し、自分たちの生活を見直すことで、生徒指導の一端としたこともあった。
自分自身、自分の子供、妻とすべて部活動のおかげで成長できたので、恩返しのつもりで部活動指導を行った。競技力向上だけでなく、教育的な価値があるものと考えている。
とはいっても、今後若い世代の教員が子育て世代に入り、今のままのワークライフは改善の必要がある。
教員の多忙化は部活動が原因とはいえない。杓子定規的な措置は避けて、ゆっくり議論し、結論を出してほしい。